

『古今和歌六帖』 本文の変容と享受

―伊勢の「雪中の筍」題の屏風歌をめぐる―

福田 智子

『古今和歌六帖』諸本には、写本系と版本系とで本文異同が生じている場合がある。本稿では、その一例として、第六帖「たかむな」題の四一二四番歌を採り上げ、出典の『伊勢集』との比較により、写本系が元来の本文に近く、版本系は後に異同が生じた可能性を指摘する。当該歌には和歌本文に「たかむな」の語はないが、『伊勢集』の詞書には筍を描いた屏風絵の歌と明記される。このような、詠歌状況に支えられた和歌は、詞書を載せない『古今和歌六帖』では、伝来の過程で本文異同が生じやすかったと見られる。なお、後の『新撰和歌六帖』の光俊歌では、『古今和歌六帖』を写本系本文で享受していた可能性がある。

一

(四一二四番)⁽¹⁾

我が国初の類題和歌集『古今和歌六帖』には、第六帖に次のような「たかむな」(筍)題の歌が二首載る。

このうち、前者の四一二三番は、『伊勢集』所載の一連の屏風歌中の一首である。

たかむな

伊勢

『伊勢集』(西本願寺蔵三十六人集)

竹のはにふりかからなん梅のはな雪のうちのをほるとみるべく

(四一二三番)

五条の内侍のかみ御四十賀をきよつらのみぶ卿のつかまつりた
まふ屏風のゑに わかなつむところ

つらゆき

春野にわかなならねど君がためとしのかずをもつまむとぞおもふ

うぐひすのしだかむなかにむめのはな散りのこらなん春のかたみに

(六二番)

むめの花のかたはらなる竹にたかうなほる所

たけのはにちりかからなむむめのはな雪のなかのもはるとみゆべく

(六三番) (以下略)

始めに示した『古今和歌六帖』四一二三番歌は、右の『伊勢集』六三番歌に当たると見られる。

この歌は、新日本古典文学大系28『平安私家集』⁽²⁾が指摘するように、「竹の傍に白梅を描き、筍を掘る人の絵」が、「季節は春だが、白梅が散りつもり雪のようにみえ」ることから、「二十四孝の孟宗の雪中の筍を想起」して詠まれたものである。「雪中の筍」の故事は、周知のとおり、呉の孟宗が、母の好物である筍を採りに竹林に入るも、冬のことで筍はなく、嘆き悲しんでいたところ、筍を得たという話で、『呉志孫皓伝』註所引「楚国先賢伝」に見え、『今昔物語集』巻第九などにも出ている。前掲書で平野氏は、「竹の葉に梅の花よ、散りかかっておくれ、雪の中の筍が張ると見えるように」と解し、結句の「はるとみゆ」の「春」に「張る」を掛けるとする。

土中から筍が出るのを「張る」と表現したと見るのだが、たとえば、木の芽がふくらむ意の「張る」が「春」との掛詞になる例は、『古今集』所載の貫之歌にも見出せる。

ゆきのふりけるをよめる

きのつらゆき

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なきさとも花ぞちりける

『古今集』巻第一春歌上、九番

前掲書では、その「張る(春)」という語を、春になって土中から頭を出し始めた筍について用いたと解したわけである。

ところが、この『伊勢集』の歌は、諸本本文を繙くと、少なからぬ異文が生じている。私家集全釈叢書16『伊勢集全釈』⁽³⁾では、伝本によってこの結句「はるとみゆべく」に異同が存することが指摘されている。すなわち、飛鳥井雅子筆本では「ほるとみるへく」、正保四年刊歌仙家集本では「とるとみるへく」になっているのである。「ほる」「とる」はいずれも、「はる」よりも「雪中の筍」の故事がより強く意識されている」と、同書は指摘する。妥当な見解であろう。

これらの異文が生じた理由を考えると、「はる」「ほる」「とる」は、いずれも仮名一字のみの違いである点に、まず着目される。とくに「ほ」(字母「保」と「は」(字母「波」)は、仮名字体の類似による誤写の可能性が高いであろう。

ともあれ、この伊勢の歌の眼目は、「屏風の画面の梅の花を雪と見立て、孟宗の『雪中の筍』の故事に結びつけたところ」であり、それが「屏風歌としての趣向」(『伊勢集全釈』)であった点は確かである。本稿冒頭で挙げた『古今和歌六帖』所載の和歌本文も、筍そのものを指す語こそ用いられていないが、「雪のうちのをほる」という表現から、屏風歌の図柄からくる故事―『古今和歌六帖』においては『伊勢集』に見られるような詞書は記載されないけれども―を読み取ることができる。

する『新編国歌大観』所収本文であった。では、他本の本文はどのようなものであろうか。いま、『図書寮叢刊 古今和歌六帖』⁽⁴⁾解題に掲載されている系統図を参考に、伝本に系統の偏りがないよう、桂宮本を含む計十本を選択し、列挙してみよう。⁽⁵⁾

○写本系統

・禁裏本Ⅰ

竹のはに 　　ふりかゝらなん　　梅のはな　　雪のうちのを　　ほるとみるへく
（桂宮本）

たけのはに 　　ふりかゝらなん　　梅のはな　　ゆきのうちのを　　ほるとみるへく
（御所本）

たけのはに 　　ふりかゝらなん　　梅のはな　　ゆきのうちのを　　ほるとみるへく
（永青文庫本）

・禁裏本ⅡA

竹の葉に 　　ふりかゝらなん　　梅花　　雪の中のを　　ほると見るへく
（林羅山旧蔵本）

竹の葉に 　　ふりかゝらなん　　梅花　　雪の中のを　　ほると見るへく
（島原松平文庫本）

竹のはに 　　ふりかゝらなん　　梅のはな　　雪の中のを　　ほるとみるへく
（神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本）

く
（神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本）

・禁裏本ⅡB

たけのはに 　　ふりかゝらなん　　梅の花　　雪の中のを　　ほるとみるへく
（神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本）

く
たけのはに 　　ふりかゝらなん　　梅の花　　雪の中のを　　ほるとみるへく
（寛平御時きさいの宮の歌合のうた）

○版本系統

く
（和学講談所旧蔵本）

竹の葉に 　　ふりかゝらなん　　梅花　　雪の中なる　　にほひとみるへく
（寛文版本）

竹の葉に 　　ふりかゝらなん　　梅のはな　　雪の中なる　　匂ひと見るへく
（黒川本）

く
（黒川本）

『古今和歌六帖』諸本は、従来、写本系本文と版本系本文に大きく分かれると言われている（前掲書解題）。当該歌においても、下句に本文異同が存するが、桂宮本など四本の写本系本文が「雪の中のを　ほると見るへく」、一方の版本系本文（寛文九年版本・黒川本）は「雪の中なる　匂ひと見るへく」になっている。すると、「竹の葉に降りかかって　おくれ、梅の花よ。雪の中で（筍を）掘っていると見えるように」という意の写本系本文に対し、版本系本文では、下句が「雪の中にある（梅花の）香りだとわかるように」という意になろう。

しかしここで、『古今和歌六帖』「たかむな」題の歌として、重大な不備があることに気づく。この版本系本文では、「雪中の筍」の故事はおろか、歌題である「たかむな」の姿も全く消え去り、梅の花の歌になってしまっているのである。

梅の花は、周知のとおり、その香りを愛でるものである。たとえば、『古今集』には、

（寛平御時きさいの宮の歌合のうた）　素性法師

ちると見てあるべきものを梅花うたてにほひのそでにとまれる

『古今集』巻第一春歌上、四七番

という歌が見える他、『伊勢集』にも、

亭子天皇をのなるゆきよしがいへにむめみにおはしまして

おもひいでてみにこざりせばむめのはなたれににほひのかをうつさ
まし
『伊勢集』九二番

という歌がある。また、白梅は、色が雪に共通するため、見間違っ
てしまう一方、雪にない薫香を放つという本意をもつことも、広く知られて
いる。

十一にて、むめのはなにゆきのかかれるを見て

にほひをぞわくべかりけるむめがえに花まがはしてふれるしらゆき
『元真集』一一三番

正月一日ころ人のもとにまかりて、むめの花にゆきのふりつむ
をみはべりて

にほひかをわがはやしらむむめのはないることならずゆきしふれれ
ば
『能宣集』一〇八番

さらに、竹と梅、あるいは竹と雪との組み合わせは、早くも『万葉集』
に、次のような歌がある。

梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林にうぐひす鳴くも

『万葉集』巻第五、八二四(八二八)番

み園生の竹の林にうぐひすはしば鳴きにしを雪は降りつつ

『万葉集』巻第十九、四二八六(四三一〇)番

元来、この歌の眼目は、屏風絵の図柄に拠った「雪中の筍」であつた。しかし、それを表現した下句「雪のうちのをほるとみるべく」は、『伊勢集』諸本においても本文異同が生じており、不安定なものである。『古今和歌六帖』写本系本文は、『伊勢集』の飛鳥井雅子筆本と共通する、比較の意味が明瞭な「ほる」本文をもつが、それでも、「むめの花のかたはらなる竹にたかうなほる所」という場面を説明する詞書を載せない『古今和歌六帖』において、何を「ほる」のか、具体的に指し示してはいない。もちろん、「たかむな」題の歌であることを考慮し、「雪中の筍」の故事を想起することは、それほど難しいことではない。だが、版本系本文が、「たかむな」題の歌としては不適当な本文、すなわち、歌題に統べられているはずの類題和歌集として、整合性を欠く本文をもっているという事実には、刮目せねばなるまい。

つとに『古今和歌六帖標注』頭注に、

此うた類従本には雪の中のをほると見るべくとあり。さにては孟宗のふることをよめるやうに聞ゆ。⁽⁶⁾

と示されるように、「雪の中のをほると見るべく」という本文ならば、

前述の故事を想起させる。一方、『古今和歌六帖標注』所載本文「雪の中なるにほひとみるへく」のような版本系本文では、「たけ」「ゆき」「にほひ」という語と組み合わせられた梅の花の歌になっており、先の故事は読み取れない。版本系本文は、元来の屏風絵の図柄から切り離された結果、必ずしも意味が明瞭ではない下句の表現が、春の景物の表現類型に引き寄せられてしまったという可能性は、じゅうぶんに考え得るであろう。類題和歌集として、あまりにも杜撰な改変とえば、確かにその通りである。しかしながら、『古今和歌六帖』成立当時の和歌資料の性格を考える時、これは必ずしも特異な現象とも言い切れないように思われる。

そもそもこの伊勢の歌は、屏風歌であり、本来は、その図柄と和歌が同時に享受されるべき形態であった。詞書に記された「むめの花のかたはらなる竹にたかうなほる所」という図柄の説明があればこそ、和歌本文に「たかうな」を具体的に指し示す語がなくても、その意味をじゅうぶんに理解することができたのである。言い換えれば、歌題の主たる素材を絵に規定され、和歌はその場面を故事に重ねて解釈することにより、屏風歌としての完成を見たと思えることができる。

ところが、類題和歌集である『古今和歌六帖』は、現時点での和歌の記載形式を見る限り、基本的には和歌本文のみを採り、詞書を記さない。このように、和歌のみが独立して享受されるようになった時、詠歌状況は、どうしても記憶の彼方に押しやられがちになるであろう。しかも、十世紀の半ばから後半にかけての時期は、『後撰和歌集』や多くの私家集に見られるように、贈答歌や比較的長い詞書を有する歌、すなわち、『場』に生き、『場』においてこそ理解できる性格の⁽⁷⁾歌が多く詠

まれていた。和歌は、それ自体で完結した表現世界を構築するというよりはむしろ、詠歌状況に依存する性格を色濃く持っている。そのような時代性を有する和歌を、和歌単独で列挙した場合には、当然、歌意が不明瞭になるものもある。それが、本文異同を生むひとつの契機になったと考えることは、あながち不自然ではないだろう。

三

『古今和歌六帖』は後世、その分類された歌題が、いわゆる「六帖題」という類型として受け入れられ、これらの題に即して作歌されることがあった。十三世紀になり、家良・為家・知家・信実・光俊の五人の歌人によって各題一首ずつ詠まれた『新撰和歌六帖』は、その代表と言えるだろう。

その『新撰和歌六帖』には、『古今和歌六帖』の題だけではなく、所載された和歌をも参考にして作ったと思しき歌がある。たとえば、次に挙げる第三帖「うき」題、一〇五五番の光俊の歌を見てみよう。

うき

うへ見えぬうきにおひたるあしのねのよわきころぞ身をばしづめ
ん (一〇五五番)

第三・四句の「あしのねのよわきころ」という表現を、『新編国歌大観』によって検すると、次の『古今和歌六帖』歌が見出せるだけで、きわめて珍しいものであることがわかる。

うき

あしのねのよわき心はうきことにまづをれふして根ぞながれける

『古今和歌六帖』第三、一六九〇番

ここで留意したいのは、いずれの歌集においても、「うき」題に分類された歌であるという点である。おそらく光俊は、作歌に際し、『古今和歌六帖』の一六九〇番歌を参考にしたのであろう。この歌が、出典未詳歌であることもまた、それを補強する証左になろう。

この『古今和歌六帖』「うき」題の歌には、諸本間で目立った本文異同は生じていない。従って、光俊が見た『古今和歌六帖』が、写本系・版本系のいずれだったのかを判断する資料にはならない。では、これまで考察してきた「たかむな」題の歌のように、写本系統と版本系統とで異なる本文を有する場合、『新撰和歌六帖』の光俊は、いかなる本文で『古今和歌六帖』を享受していたのだろうか。

ここで「たかむな」題の歌を検討する前に、もう一例、別の歌について考察しておきたい。「と(戸)」題の歌である。

『古今和歌六帖』第二帖一三七八番

おく山のまきの板戸をとくくとしらてわかひかむにいて、きなさ

ね (桂宮本)

おく山のまきの板とを、しひらきしゑやいてこね後はいか、せん

(寛文九年版本)

この一三七九番歌は、前掲「たかむな」題の伊勢歌と同様、桂宮本の

他、永青文庫本・和学講談所旧蔵本・林羅山旧蔵本他の写本系本文と、寛文九年版本・黒川本の版本系本文で、第二句以降に大きな異同が存する。だが、先の「たかむな」歌と異なるのは、この場合、単なる本文異同だけではなく、それによって、出典となる歌が異なってくるという点である。すなわち、写本系は『万葉集』巻第十四、三四六七(三四八六)番歌を、また版本系統は『万葉集』巻第十一、二五二九(二五二四)番を、それぞれ別個に出典とすると考えられるのである。

奥山の真木の板戸をとどとして我が開かむに入り来て寝さね

『万葉集』巻第十四、三四六七(三四八六)番

奥山の真木の板戸を押し開きしゑや出で来ね後は何せむ

『万葉集』巻第十一、二五二九(二五二四)番

『古今和歌六帖』成立当時、この箇所がどのような本文であったのかは、にわかには決しがたい。だが、桂宮本など写本系統に本文の乱れが存することから推すと、あるいは、この写本系の乱れた本文を整えるために手が加えられた結果、版本系本文は、『万葉集』の別の歌が差し替えられるかたちになってしまったとも考えられよう。⁽¹⁰⁾

さて、この「と(戸)」題の『新撰和歌六帖』における光俊の歌は、次のようである。

と

ふきたつる槇のいたどのはたはたと身もふるはるる山おろしかな

(八四〇番)

第三句「はたはた(と)」は、『新編国歌大観』を検しても唯一例の、山嵐によつて槇の板戸が立てる擬声語である。この表現は、「とど」という、とどろき響く音を表す擬声語を用いた『古今和歌六帖』写本系本文(『万葉集』三四六七(三四八六) 番歌)に発想を得た可能性がありはしないか。

もつとも、その場合、光俊が見た『古今和歌六帖』本文は、写本系の「とくく」とではなく、出典の『万葉集』本文「とどとして」でなければならぬ。とすれば、光俊が見た『古今和歌六帖』は、この歌の第三・四句「とどとして我が開かむに」が、写本系の「とくく」としられてわかひかむに」と誤写される前の段階の本文である必要がある。この万葉歌が、原文の一字一音の漢字表記を離れ、仮名書きで「と、ととしてわかひらかむに」と表記されれば、「と、と」から「とくく」と、「してわかひらかむに」から「しられてわかひかむに」という異同が生じるのは、踊り字と「く」の字形の類似や、「ら」一文字の挿入・脱落を想定すれば、それほど考えにくいことではない。「とどとして」という、平安朝ではなじみのない表現が、これらの誤写を誘発したということは、じゅうぶんに想定されよう。

槇の板戸が立てる音の擬声語として、先行例「とど」が、「はたはた」という新たな語を生み出す契機になったとすれば、この例は、光俊の目を通して、十三世紀の『古今和歌六帖』の姿——写本系統で、しかも、

現存諸本では遡り得ない、本文の乱れを起こす前の姿——の一端を示すことになる。⁽¹¹⁾

これらの例を踏まえて、いまいちど「たかむな」題の歌に戻ろう。『新撰和歌六帖』には、次のような五首の歌が収載されている。

たかむな

くれ竹のおくれてさせるねたかんむもれながらに身はおいにけり

(二三三一番)

いかでわがかきねにおふるたけのこに世のうきふしを思ひしらせじ

(二三三二番)

おひいづる夏のかきねの竹の子はさこそみじかき世をかさぬらめ

(二三三三番)

おひたたんふしのかずある竹の子はみじかしとてもあだにやはみる

(二三三四番)

いかばかり雪の下なるたけのこのおや思ふ人のこころしりけん

(二三三五番)

それぞれ「ねたかな」「たけのこ」を詠んでいるが、『古今和歌六帖』四一二四番(つらゆき)のような物名歌はない。技巧的にむずかしいということだけではなく、『古今和歌六帖』成立時と目される十世紀後半という時代の嗜好と、『新撰和歌六帖』の十三世紀のそれとが異なっていたことを示しているとも見られることも許されよう。⁽¹²⁾

その『新撰和歌六帖』「たかむな」題の歌における光俊の作は、傍線を付した二三三五番歌である。これが、他ならぬ「雪中の筍」の歌であ

ることは、注目されてよいであろう。

もつとも、「雪中の筍」の故事は、たとえば、

為君 キミガタメ 根刺将求砥 ネザシモトムト 雪深杵 ユキフカキ 竹之園生緒 タケノソノフヲ 別迷鉤 ワケマドフカナ

『新撰和歌集』巻之上、一九一番

雪中竹豈有萌芽 せつちゆうのたけめにはうがらんや 孝子祈天得筍多 かうじていたいて行のたまふとねほし
 植物冬園何事苦 ものさるるふゆのふのにとくむしき 帰歟行客哭還歌 かへらぬやかうきやくくまたうたふ

『新撰和歌集』巻之上、一九二番

といった和歌や漢詩に見出すことができ、また、

筍ををさなき人におこせて

おやのためむかしの人はぬきけるをたけのこによりみるもめづらし
 返し

しもをわけてぬくこそおやの為ならめこはさかりなるためとこそき
 け 『赤染衛門集』一一七・一一八番

という贈答歌からは、当時の貴族の生活の中で、筍そのものが身近な食材であり、「雪中の筍」の故事も、しばしば和歌の素材になり得ていることがわかる。とすれば、『新撰和歌六帖』の光俊歌が、「雪中の筍」を詠んでいることのみをもって、『古今和歌六帖』四一二三番の伊勢の歌、しかも写本系本文を受けての作歌であると即断することは控えねばなるまい。がしかし、これまで見てきた『新撰和歌六帖』における光俊の歌作りを考慮する時、光俊が『古今和歌六帖』の写本系本文に触発されて、

「雪中の筍」の歌を作った可能性を想定してみることも、あながち的外れではないだろう。あるいは光俊は、作歌に際し、家良ら他の四人の歌人に比して、当時手にするのできた『古今和歌六帖』の和歌を参看するところ大であったのかもしれない。⁽¹³⁾

光俊は、先の「たかむな」題でも、『古今和歌六帖』伊勢の歌の写本系本文と同じく、「雪中の筍」を詠んでいた。「と(戸)」題の場合も同様に、『古今和歌六帖』は、版本系統ではなく、写本系統を享受していたと見なければならぬ。この点は、鎌倉中期の一歌人が享受した、鎌倉期の『古今和歌六帖』本文を、間接的にせよ窺い知る手掛かりになるように思われる。

『古今和歌六帖』成立時の原初形態がいかなるものであったのか、遡ることは容易なことではない。本稿では、詠歌状況に依拠した和歌を単独で掲載するという形式が、伝来の過程で大きな本文異同を生みやすいことを、伊勢の「たかむな」題の屏風歌を通して考察してきた。この場合、『古今和歌六帖』の写本系本文が本来の本文に近いと考えられる。そして、少なくとも十三世紀の『新撰和歌六帖』成立時には、『古今和歌六帖』は、少なくとも本稿で採り上げた光俊歌に関する限り、写本系本文が享受されていた可能性が指摘できる。今後は、『古今和歌六帖』全体を視野に入れて、写本系・版本系本文の流布・享受のあり方を把握する必要があるだろう。

註

1 以下、和歌の引用は、特に断らない限り『新編国歌大観』に拠る。

- 2 平野由紀子氏校注、岩波書店、一九九四年十二月。『伊勢集』の底本は、西本願寺本三十六人家集。
- 3 関根慶子氏・山下道代氏共著、風間書房、平成八年二月。底本は、註2と同様、西本願寺本三十六人家集。
- 4 養徳社、昭和四十四年三月。なお、伝本の呼称については、適宜改め、略称を用いた。
- 5 本文の引用は、寛文九年版本は架蔵本を用い、それ以外は原本調査に拠る。
- 6 本文の引用は、架蔵本に拠り、適宜句点を付した。
- 7 新日本古典文学大系6『後撰和歌集』（片桐洋一氏校注、岩波書店、一九九〇年四月）解説「五『後撰和歌集』における詠歌の場」四八六頁。
- 8 光俊の詠作時期は、書陵部蔵万里小路惟房筆本に拠れば、寛元元年（一二四三）十二月二十一日から翌二年三月二十六日までという。当時四十二歳。詳しくは、安井久善氏「『新撰六帖題和歌』の成立をめぐる」（『語文』（日本大学国文学会）第三十九号、一九七四年三月）を参照されたい。
- 9 この歌が出典未詳であることは、早くも『校證古今歌六帖』が指摘するところである。また、『新編国歌大観』所収歌をあらためて検してみても、出典と見られる歌は見出せない。
- 10 富永洋子氏「古今和歌六帖の研究―細川家永青文庫本及び松平文庫本を中心として―」（『国語と国文学』第四十二巻第一号、一九六五年一月）では、永青文庫本と寛文九年版本を基とする標注本とを比較検討し、「寛文版本は、それ以前の過程に於て、誰かの手によつて、意識的な校訂がなされたのではなからうか。昔から僻事の多いので有名な古今六帖を、少しでも元の形に戻す為、原典のわかつているものは、六帖の作者表記や歌の本文に関して、明らかに間違っていると思われる箇所を、原典の方へ改めるという作業が行われたという可能性は十分に考えられよう」と、つとに述べられている。また、岸上慎二氏「古今六帖本文覚え書―写本の形による読みⅡ―」（『語文』（日本大学国文学会）第六十七号、一九八七年三月）でも、「寛文九年版本の出版に当って古今六帖は幅広い読者を予想して本文の整備が更に一層要求されたであらうのをうけて、多くの本文の校訂の手が入ったやうに思はれる」と指摘されている。
- 11 『古今和歌六帖』は、桂宮本の本奥書に記されるように、鎌倉期には何本かの伝本があり、すでにその時点で、本文に多くの誤脱があったことが知られる。現存諸本は、ほとんどが江戸期の写本である。詳しくは、『新編国歌大観』「古今和歌六帖」解題（橋本美男氏・相馬万里子氏・小池一行氏）他を参照されたい。
- 12 佐藤恒雄氏「新撰六帖題和歌の成立について」（『香川大学教育学部研究報告』第一部四十九号、一九八〇年三月）によれば、『新撰和歌六帖』の歌題は、『古今和歌六帖』に拠りながら、物名として詠まれやすい題が排除される傾向があるという。これも、『新撰和歌六帖』「たかむな」題に物名歌がないことと軌を一にする現象と捉えられよう。
- 13 光俊は『新撰和歌六帖』詠作後、『現存和歌六帖』を編纂するが、この時の歌題は、『新撰和歌六帖』ではなく、『古今和歌六帖』に倣っている。

附記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」(課題番号22500236、平成二十一〜二十四年度)における研究の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器「e-CSA」Ver.2.00を使用した。